



地域なんでも情報局

第12号

平成25年9月17日発行

長崎市社会福祉協議会
長崎市上町1番33号

TEL: 828-1281

今、見直される異世代間交流事業

近年、従来からの三世大家族から、夫婦と子どもからなる核家族が一般化すると共に、非婚化・晩婚化や高齢者世帯・独居老人の増加により、地縁を中心とする旧来型の地域コミュニティが衰退することによる、地域関係の希薄化・空洞化が課題となつていま



は、日程の問題です。子どもたちも塾に行ったり水泳教室に行ったり、なかなか忙しいので、そういう子どもたちの日程に当たらないようにみんながふれあえる機会が持てるような日時を設定して事業を行っていきます。我々大人が、出来るだけ子どもたちの日程に合わせて行事の日程を組むように気を付けているということです。」

「となり近所の関係が薄い」ということが、多くの地域で悩みや課題として挙げられていました。地域において支え合う関係をつくるには、まず、地域のみなさんが「顔の見える関係」であることが必要です。そこで、各地域で異世代間の交流を通じて、世代間の絆を深めることによる地域コミュニティの再生、再構築を図って行こうという動きが見られるようになってきたことは、地域の中で異世代が見直されはじめて来ている証拠と言えるかもしれません。長崎市内でも、異世代間交流に取り組む地域が増えてきています。立神地区においては、夏祭り、餅つき、高齢者サロン等に児童を招くなど、多くの異世代間交流の事業を展開しています。そこで、長崎市社会福祉協議会立神支部の磯支部長にその理由を伺いました。

磯支部長「立神地区は以前と比べ、児童数が減少傾向にあります。そこで、地域の融和を図り、住み良いまちづくりをしようということを目的に、児童の皆さんを地域の行事に積極的に招いています。子どもたちは将来の宝であるので、大事に地域の方々と触れ合う場所を今後も作って行きたいと考え、立神地区では地域の行事に異世代間交流を取り入れています。」

Q、異世代間交流の事業を通じて、立神地区がどういう地域になって欲しいと考えていますか？

磯支部長「地域の人たちと一緒に、我々が住んでいるまちを住み良くしていこうというところに目的があるので、子どもに限らず大人も助け合っていて、支え合っていて、一丸となつた地域が続いて行くことを願っています。」



子どもと一緒に門松作りをしました



ここでご紹介した立神地区のように、異世代間交流を通じて、地域住民の世代を越えた関係づくりを図っているという動きが、全国各地で見られています。異世代間交流は、地域コミュニティの再生、再構築に向けたキーワードの一つと言えるのかもしれませんが。

あの人〜どんな人〜どんな人〜

寺田真理さん タイヤラン下地区



今回紹介するのは、平成25年5月14日に長崎市社会福祉協議会ダイヤランド支部 支部長に就任された寺田真理さんです。寺田さんは、支部長に就任する6年ほど前から支部の総務をされていて、支部が主催する様々な事業に携わってきた経験の中でみなさんから厚い信頼を受けていました。「地域のみなさんの声に背中を押されて渋々承諾したのが就任のきっかけでした。」と笑顔で語る寺田さんは、他にも主任児童委員や地元学童保育の運営委員を兼務されています。ある日、南長崎小学校の敷地内に併設されている学童保育で、保護者や指導員が子どもたちのために頑張っておられる姿を見た寺田さんは、「社協支部としても、地域の力を借りて何か協力してあげたい」と支部役員会に意見を求めました。寺田さんは、昔の遊び体験を交えた子どもと住民との交流活動を提案。その中で、ケガの心配から最近触れること自体が少なくなった刃物を使った工作を子どもたちに体験させ、心の落ち着きや集中力を養わせたいと考え、刃物やキリを使って竹を切るところからの作業を提案しました。刃物の使用はやはり危ないのでは？との反対の意見も出るなど、役員会では熱い議論が繰り広げ



られたそうです。様々な意見のやりとりを経て、最終的に何事も体験という安全面での配慮が十分考慮されることになりました。見のやりとりを経た、最終的に何事も体験という安全面での配慮が十分考慮されることになりました。見のやりとりを経て、最終的に何事も体験という安全面での配慮が十分考慮されることになりました。

遠くの親戚より近くの他人



防災マップづくり

「○○さん家の△△おばあちゃんはお隣の□□さんと私が支援するわい。」8月4(日)に式見町の下浜自治会で行われた防災ささえあいマップづくり講座での一コマ。

「遠くの親戚より近くの他人」とはよく言ったもので、大規模災害が発生した際、住民の命を救ったのは近隣住民だったという話をよく耳にします。一方で個人情報保護への過剰反応から地域での支援体制づくりが難航しているという地域も多くあるようです。今回のこの防災ささえあいマップづくりは、災害が起きた時(又はその予兆がある時)に地域の住民同士で避難支援を行う際の仕組みづくりを目的にしており、誰が支援を必要とする人なのか?また、その支援者は誰がいいのか?をみんなで話し合いながら決めるところにその特徴があります。住民同士のつながりや関係性を熟知した住民自らが仕組みづくりを主体的に参加することにより、きめ細かな支援体制づくりが可能となります。マップづくりの冒頭の挨拶で、「みんなのできることに意義がある」と熱く語る下浜自治会長の浅川さん。今回のマップづくりで先立

ち、班長や市民防災リーダーをはじめとした住民への事前説明にも十分時間をかけ、丁寧に準備を重ねてこられたそうです。下浜自治会では、今回みんなで作成した(大判)マップを、A4クリアファイルに縮小し、実際の避難の際に活用できる避難支援ツール(道具)づくりを行い、秋にそれを用いた避難訓練の実施を予定されているそうです。要援護者を台帳やリストではなく、地図上に明記することにより、要援護者と支援者の位置関係が一目瞭然となり、非常事態における冷静な避難支援行動にもつながることが期待されます。

ひとたび災害が起きると、その地域が潜在的に抱えていた課題が露わになると言われています。いつ起こるか分からない自然災害に備え、皆さんの地域でも取り組まれてみてはいかがでしょうか。

なるほど! 大判地図から



クリアファイルへ



川内自治会避難訓練実施!

川内自治会は、長崎市社会福祉協議会戸石支部の管内で、諫早市と長崎市の境にあります。この地区は、31年前の長崎大水害の時に、8人の犠牲者が出たという過去もあり、災害への危機意識がもともと高く、昨年の7月には自主防災組織が結成されました。

災害が起こった場合には、自治会内で連絡を取り合い、あらかじめ決めておいたリーダーが、近隣の方と一緒に避難をするように、防災の意識を高めています。さらに、今年の3月には、地区の防災マップを作成して、災害が起こった場合に危険なところや、災害時に支援が必要な世帯を確認しました。

自主防災組織が結成され、地域の危険箇所も確認し、自治会集会所を一時避難所とした避難ルートも想定しましたが、「実際に災害が起こった時に、スムーズに避難ができるように訓練をしてみよう。」ということとで、今年の7月21日に避難訓練を実施しました。

訓練当日は、川内地区に大雨が降り、土砂災害発生危険が



避難訓練の様子



集会所での防災講習の様子

あるので避難勧告が出されたという想定で、防災無線で住民の方々に避難を呼びかけました。避難の呼び掛けがあった数分後には、それぞれの家から住民が出てきて、地区の防災リーダーや、消防団の誘導のもと、スムーズに一時避難所である自治会集会所に続々と集まってきました。

今回は、災害時要援護者も一緒に避難するという想定で、車イスや担架を使って、消防団や住民同士で助け合って、避難の手助けをしていました。

集会所に集まった住民は、120名ほどでしたが、これは住民の半数以上になり、この川内地区で、防災の意識が住民の間で浸透していきつつあると感じました。

避難してきた住民の中には、小さいお子さんがいる若いお母さんたちもいて、お話しを伺うと、「いざ災害が起こった時に、どこに逃げたらいいのか不安もあったが、こうして近所を助け合ってくれれば心強い。」と、今回の訓練を通じて住民同士の絆もより一層深まったようです。

いづもふれあいの集い



7月20日、滑石地区ふれあいセンターにて、長崎市社会福祉協議会滑石団地支部の主催による「いづもふれあいの集い」が開催され、約160名の子ども達が参加しました。この「子どもふれあいの集い」は、平成7年度より、大園、北陽、虹ヶ丘の各小学校の児童を一同に集め、アトラクションやゲームを楽しみながら相互の交流を深め、地域児童の健全育成を図ることを目的に、毎年7月に滑石地区ふれあいセンターで開催されています。

今年度は、はじめに、小学生のダンスチームによるダンスが披露された後、「とっちゃんせんせい」と、長崎市レクリエーション協会の都知木(とちぎ)先生によるレクリエーションが「大きくみつつぱん!パン!パン!」の掛け声で開始され、会場は子どもたちの笑いと歓声でいっぱいになりました。大園、北陽、虹ヶ丘の各小学校からそれぞれ集まった子ども達は、とっちゃんせんせいによる楽しいトークとレクリエーションで、他校の子どもたちともすっかり仲良くなれた様子でした。



社協会員募集中!!

『地域なんでも情報局』は、市民の皆様からお寄せいただいた社協会費により発行しています。